
あゝ皇国の零 艦上戦闘機閃光開発物語

瑞鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あゝ皇国の零 艦上戦闘機閃光開発物語

【Nコード】

N3552H

【作者名】

瑞鶴

【あらすじ】

ハルケギニアに飛ばされた日本軍の活躍を描くあゝ皇国の零の外伝的なお話。ハルケギニア世界大戦の太平洋戦線にてまちがいに大和・日本軍を勝利に導いたであろう高性能戦闘機「閃光」。その閃光の開発に苦悩するドイツ軍人、ケンペル。いつのまにか試作機が存在した「閃光」。その試作機が完成するまでのケンペル少佐（後に中佐）の苦勞を描いたお話です

1 新型機（前書き）

更新速度は「あゝ皇国の零〆トリステインの逆襲」
が優先ですのでちょっと遅いです

1 新型機

ケンペル少佐が仲間になってさらに工場もとってケンペル少佐が責任者になってから
1ヶ月がたった

ケンペル少佐は不安で仕方なかった

零式艦上戦闘機を造っているうちにきがついたのだ

運動性能や武装は一級品の戦闘機であるが被弾に弱く剛性も低く急降下性能も悪く

しかも高速粋で運動性能がかなり低下するこの戦闘機を主力として使用している

日本軍に少々不安であった

「新たに、新型機を造る必要があるかもしれないな」

「将来的に性能不足になるかもしれないな」

ケンペル少佐の助手、アドルフ・バーテン中尉

「...といいますと？」

「私はこう考える、将来的にハルケギニアの各国の装備は急に近代化する」

「なぜ？ 今はこれほど送れているといえますのに？」

「我々や日本軍、ましてやアメリカ軍までここに現れた、現に日本軍は

ほかの国とかかわってしまっている」

「…ということは将来、日本軍と互角に戦える軍隊の誕生もありえるのです」

「…そうですね？」

「多分…ですね」

「我々のほかにもこの世界に飛ばされた人がいるのはわかりました、…ということは科学者も飛ばされている可能性もあります」

「私はそういつたことについて多少知識がある、だがどこかにはより専門的な

事を知っている人もいるはずだよ」

「いつかは…戦いは近代戦になる」

「ロマリアじや場違いな工芸品による空軍が編成されていると聞くと、ガリアにも

つい最近航空機が提供された、いつかは…」

「可能性としてはありえるかもしれませんがね」

「造りましょう、新型機を」

「しかし上が受け入れてくれますかね？」

「わからない、でもいずれやらなければいけない」

「零式戦も旧式化する時がいつか来る」

「…そうですね！」

こうして…将来を見積もってケンペル少佐は新型機の開発を考えた

まだ具体的にどんな飛行機を造るかは未定であるが自分の豊富な知識で

新型戦闘機を造る、それが唯一出来る事、そう心に決めた

2 陸軍機か海軍機か

海軍司令部 -

第7艦隊司令官、木下四郎中将

「新型の戦闘機？ ですか」

「なぜ私に？ 私は船専門ですが？」

「一応、私は海軍機を製作する予定でありますので、海軍の総司令官である貴方に

許可をとらなくてはと

「そういうことですか、まあいいでしょう、後進的なハルケギニアで零式戦の

後続機は必要ないと思いますがね」

一応、木下は開発の許可を下した、この時誰も零式戦の後続機が必要だとは思わなかった

もちろんハケルギニアの文明レベルが上がるとも思わなかった

始めて気が付いたのがこのゲンペル少佐であった

コソ…

（いい事を聞いた…海軍なんかいろいろ制約つけないと航空機として運用できない

所よりも陸軍を造らせたほうが頭がいいな）

今の話をこつそり聞いていたのは島でも有名な海軍嫌いである三島

徹夜伍長だ

タタタタッ

陸軍航空隊総司令官、高木大佐

「…そうか、っでどうしたいんだ？」

「はっ！ 自分の案で制約の多く性能もあまりよろしくない海軍機よりも

陸軍機を造らせたほうがよいのではと思うのです！」

「ふーん、しかしな、海軍機のほうが航続距離が長いんだ」

「今回近代装備をもつ軍隊はないわけだし、もしも戦争になったって強い飛行機はいらない」

「どうせ相手は竜だ、ならほどほどに強く航続距離のある飛行機を使ったほうが利口だと思わないか？」

「しかし…」

「それに新型機を造るメリットがあるのかが私にはわからない」

「そうですか…」

しかし三島伍長は納得がいかなかった
直接、ケンペル少佐に頼み込むことにした

軍需工場 -

「おお、貴方が三島さんですか」

「いえいえ貴方こそケンペル少佐ですね」

「はははっ　ところでなんのご用ですか？」

「ええっ　実はですね、陸軍にも新型機を造ってほしいのです」

「新型機…ですか？」

「はい、実は偶然、貴方と木下中將がお話をしている所を見まして
「それで思っただんです、制約の多いめんどくさい海軍機よりもおも
いっきりフルに

造れる陸軍機を造ったほうが利口ではないかと」

「なるほど、確かに艦上戦闘機はいろいろ制約があります」

「しかし、私はいずれ大陸での戦いより海上での戦いのほうが
多く行われると思うんです」

ケンペル少佐は陸軍よりも海軍のほうが今後の戦いで活躍すると言
った

しかしこれはほぼ正解であった、後のハルケギニア世界大戦の太平
洋戦線では

もちろん陸軍も大活躍したが海軍の力あってこそその戦いであった

ケンペル少佐はこの時点で、そんな戦いがあるだろうと読んでいた
まるで予言者のようだった
しかし三島伍長は反論する

「それは陸軍を馬鹿にしているのですか？」

「いえ、そういうわけではありませんが…」

「あまり馬鹿にしますと、司令官に言って海軍機造ってる第2小工場をぶっ壊しますけど?」

「そ…それは…」

「では、約束どおり陸軍機を造ってもらいたい」

「しかし…ですね…」

「しかしですと? まだめんどくさい海軍機を造る気ですか?」

「それに陸軍機の航続距離だって長いんですよ?」

「…だが私は…今後…といっても数年後の事です。海上戦が多く行われると…」

「しかも零式戦より手ごわい戦闘機だつてでてくる可能性は充分あります」

ケンペル少佐は身をもって体験済みだ、自身がそうである、bf109や輸送機をもった自分らが2万の大軍を持つ日本軍と出会ったのだから

きっとそんな国が世の中あるに違いない、もしかすればハルケギニアと手を

結んでいるかもしれない、いろいろ考えていた

実際そうなってしまったが

また彼は実態を知らないがロマリア空軍にも警戒している

機種はよくわからないものの場違いな工芸品の200機で編成され

た空軍があるとガリアから

聞いた、将来ロマリアと戦争になった場合を考えて、またほかの国がもしもロマリアの

ように装備を近代化した場合を考えての保険的な意味だ

「それに…戦争中じゃなくとも兵器を新型化することぐらい、軍隊として当然だと

思いますかね」

「まずは海軍機から、次に陸軍機を造りますよ」

「そこまで言うのでしたらいいですよ、諦めますよ」

三島伍長は出ていった

しかし夜だった

ダァン！

「なんですか！？」

バババ…

「うわああ！！」

「職員の声！！」

念の為拳銃を持って向かって見ると陸軍の軍人が工場で暴れていた

「何者だ！！」

「ん？」

「み…三島伍長？」

「ふふ…言いましたよね？ 海軍機造ってる工場襲うって」

「これは俺独断の作戦ですが…このままですと…フッフ」

「おのれ！」

「これ…なんですか？」

「はっ！！ それは計画書！」

ビリビリビリ…

「貴様！ なんとる事を！！」

「ふふふっ」

「陸軍馬鹿にしゃがってこのやろおお！」

ガシッ！

すると仲間の陸軍が現れた

「おい三島！ やめろ！」

「三島！ 目覚ませ！」

「三島！！ 貴様！！」

バキィ！

「うっ！」

ボタン…

翌日、三島の扱いについての軍法会議が行われた、その結果、解雇処分となった

陸軍からはケンペル少佐に賠償金を支払った

しかしケンペル少佐は…

「はあ…」

「少佐…」

「まったく…これだから開発は大変だ…」

「少佐…」

「まだ…あるだろうなこんなこと…」

「よくはわからないが…」

「…」

「だがな、絶対日本軍は海上での戦いが増える、そして…こんだけ近代装備を

もっている奴がいたら…いつかはこの世界でも零式戦が旧式化する」

「その保険の為に…俺は開発を続ける」

「…そうですね、保障はないですが兵器の新型化するには損ありませんよね」

「ああ、また計画しなそう」

こうして、陸軍の強硬派との事件があつたものの
ケンペル少佐はなんとそれでも新型機を造る決意でいた

まずは…工場直す必要があつた…

2 陸軍機か海軍機か（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
しかし根拠のない事があとにあたっちゃうなんて
ケンペル少佐何気にすごいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3552h/>

あゝ皇国の零 艦上戦闘機閃光開発物語

2010年10月10日18時32分発行